

取組の概要

対象畜種

牛

協議会構成員

畜産農家、耕種農家、真室川町農業協同組合、真室川町
山形県農業総合研究センター畜産試験場、山形県最上総合
支庁産業経済部農業技術普及課

飼料用米生産面積

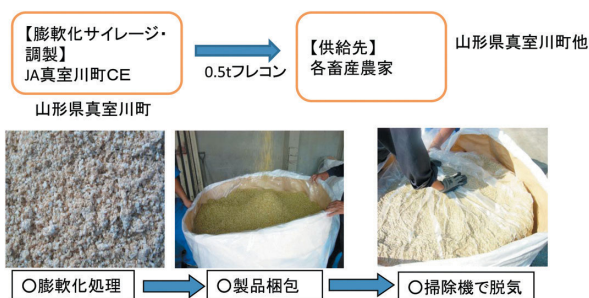
6.6ha

供試品種

べこあおば 0.9ha
べこごのみ 1.9ha
その他主食用品種 3.8ha

取組内容

①飼料用米の流通、保管、調製に係る実証調査



- ◆主食用米との区分を図るため、生産者は組織に限定した栽培。
- ◆収穫物はカントリーエレベーターに全量集荷
- ◆JA C Eにおいて、膨軟化サイレージの加工を行った。

②飼料用米の給与による家畜・畜産物への影響調査
(畜産物の成分分析を含む)

試験設計：

肥育牛への給与試験は、肥育前期時に配合飼料に

5%ほど混ぜて給与した。また、繁殖牛では、分娩後泌乳期における給与と発情回帰への悪影響がないか、分娩後の繁殖牛に給与した。給与量は、配合飼料の20%~40%を代替して給与した。酪農家では、搾乳牛への給与で、搾乳牛へ悪影響がないかを実施した。

調査項目：給与牛への影響

嗜好性に優れ、飼料価値の高い自給飼料であることが、わかった。

給与の注意点は、発酵初期にアルコール臭が強く、このときに開封すると空気中で変異しやすく、アルコールが有害なアセトンに変化することがわかった。この為、給与する際は、2ヶ月以上おいてから給与を始めると、乳酸が増加し、変廃を抑制することができた。TMR給与では牛の摂取量が良くなり、製造後時間のたったTMRの嗜好性が悪くならない効果があった。

③飼料用米を利用した畜産物の普及活動

- ◆飼料用米解説のパンフレット作成
- ◆牛肉産直会場で使用する飼料用米解説パネルの作成

取組によってわかったこと

1. 調製・保管・流通について、次のことがわかりました。

- 膨軟化処理について、大きな問題もなく処理することができた。また、CE本体のプラントは使用しない為、異品種混入の問題もなく、新規需要米の収穫確認も容易にできた。
- 1日の処理量が、1ha程度なので生粗の貯蔵が必要。先にサイレージ梱包するか、サイロ等の検討が必要。
- 夏場は、2日位で変廃するので、TMR調整し効率的な給与方法が必要。
- 調整、加工流通経費ではもう少しコストダウンを図りたい。(1kg/15円程度)
- 物流コストをかけず地域内で取組めれば、エネルギー単収の高い低コスト自給飼料ができる。

2. 家畜・畜産物への影響について、次のことがわかりました。

- 飼料価値を測定する給与試験をしていないが、推定のTDNを策定している。(DM中70~75%)
実際給与して、繁殖、肉用牛ともに悪影響はなく、配合飼料の代替として十分な飼料価値があることを確認した。また、酪農家では、給与している牛群のコンディションが良い為、数値以上の栄養価があるのではないかと

考えている。TMR給与では、飼料の摂取量が増え、夏場の摂取量低下を防ぐ効果を期待している。

また、稲SGSのTMRは、調製後時間がたっても嗜好性が落ちないという効果も現れている。今後、栄養価値の測定が必要とされる。

肉用繁殖牛、肥育和牛、搾乳牛で試験給与しているが、嗜好性がよく良好に飼育されている。

3. 普及活動について、次のことがわかりました。

- 組合員への反響が大きく、認識が広まりました。飼料用米を給与するという取組の意義（国産飼料であることや、水田の維持ができること等）から、食味（おいしいとの評価）に至る、全体の流れについても、非常に高い関心を得ています。
- 畜産農家においても飼料高騰といった厳しい情勢に直面しておりましたが、

これを転機と考え、前向きにこれに立ち向かう意欲が生まれた。

4. 今後の飼料用米の取組予定などについて

- 全国的に事例のない取組であったことから、走りながらの検証となったが、関係機関のサポートで成功することが出来た。

出来上がった製品は、水田の保全機能と日本の新しい畜産生産基盤の変革を秘めた飼料となった。今後も地域内での自給濃厚飼料の生産、耕畜連携の取り組みで、畜産物のブランド化など地場産業への波及に期待したい。

真室川町内の畜産農家7名、耕種農家7名
J A 真室川町営農販売課
真室川町産業課
山形県農業総合研究センター畜産試験場
// 最上総合支庁農業技術普及課

参考データ・写真等

